

[美術館員随想]

大和文華館を去るにあたって

学芸部次長 村田 靖子

私がまだ見習いの学芸部所属の職員として初めて大和文華館を訪れたのは、大和文華館自体も若い創立12周年を迎えたばかりの頃であった。4月の初めだった。広い駐車場を過ぎ小高い松林の中い伸びる緩やかな坂道を上って到達した白壁に青緑色を配した清楚な建物。入口から直線に展示場に向っている広いロビーの大きな格子模様。両側の大きな障子窓の下に設けられた黒々としたソファ。廊下と休憩室を兼ねたこの広い空間が、展示場を神殿に見立てた参道の意味があるということを知った。

その広いロビーはダンスをしたくなるほどの明るい光に満ち、前方に見える展示場の緑々とした竹が清々しさを増していた。ギャラリーはこの竹の庭から注し込む明りによって床までも輝いて見え、名品展を開催中の展示ケースのガラスは良く磨かれて、展示物は生々として見えた。

大学で仏像彫刻を学んだ私にとって、奈良の静かな佇まいの中に身を置くことは憧れであった。それまで、毎年の学外演習で奈良の寺々を訪れるだけであった私は、当時の石澤館長のスカウトで東京から単身赴任(!)し、大和文華館に近い所で一人住まいを始めた。

大学院を出たけれど直ぐには定職がなく、東京の国立博物館で「百年史」編纂の臨時職員であった私を、元東京文化財研究所に勤務されたことのある館長が求人上京され、多少「英語の出来る人」の条件に合ったので引張られたのである。初めて得た正館員の仕事を、両親から遠く離れ、身寄りもないこの土地で得たことを寂しく思わないことはなかったが、女性としても独立心に燃えていた。その心が私を支えた。それでも毎月一度少ない給料を工面して、両親の元に戻り、短い滞在の後、後ろ髪引かれる思いで帰って来た。—その両親も今は亡い。替りに家族が来た。

学芸部の正職員になって間もなく、友の会へ向けた「美のたより」の編集担当となった。「美のたより」第25号。ピンクの表紙の下の方に奈良の鹿に見立てて華を喰えた鹿が5頭配されている。この鹿は21号の3列に並んだ9頭から始まって毎号一頭ずつ減り、30号で一頭もいなくなった。

記事作成の為に館長と共に山中商会のニューヨーク支店長を勤められた白井信三氏の親族をお訪ねし、それは名品の「白磁博山炉」にまつわる館長の文章にまとめられた。

その年の12月には始めて、平常

展「仏教の美術」を任された。大学では歴史上の名品ばかりを学んで来た目で見ると、美術館のコレクションはもっと親しみを感じるものもあり、仏画や工芸をも含んでいることが新たな勉強となった。東京で学んだことが奈良で通じることに何か不思議な気さえた。その後、「平安・鎌倉の美術」「東洋の古代美術」、新しく「東洋の人物・動物像」「金属工芸の美」なども加わった。それらは2～3年に一度巡ってくる。合わせて30回の平常展と4つの特別展(金銅仏展3回、ガンダーラ彫刻展1回)を担当し、2つの共同参加の特別展に加わった。第1回目の「百済・新羅の金銅仏—飛鳥・白鳳の源流」展(昭和57年)は予想外の大入りで、本社から韓国旅行のご褒美が出た。私の韓国での仏像調査の最初だった。良き時代でもあった。

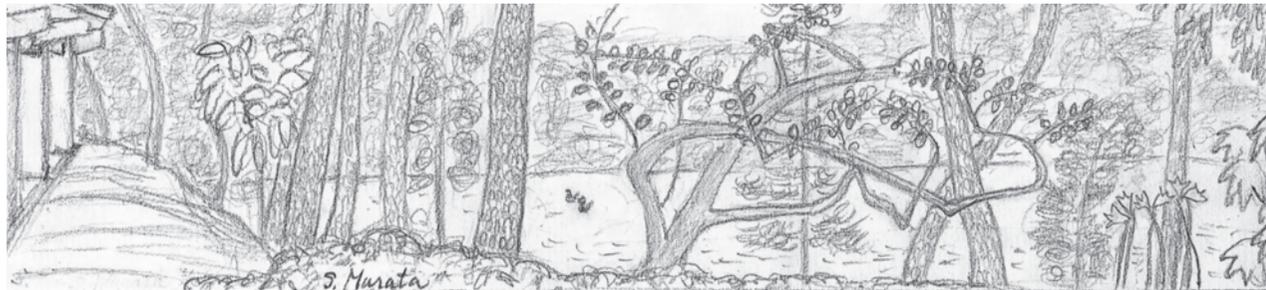
初代矢代館長は私の赴任の3年前に退任されて大磯に隠棲されていたが、東京での講演を館員となる直前に拝聴し、眉の太い面長な風貌を印象付けられた。矢代館長以来、世界的にも名を馳せていた当館に海外からの来館者は多く、時々展示場を案内した。米国人パーク夫妻から根付けの寄贈があったのもその頃である。フリア美術館々長、ドイツのケルン美術館々長等も見えた。当時は「美のたより」に「有友自遠方来」という欄があって、それら珍しい人の来訪を報じた。三代の館長の下で、仕事は男女同じ条件で振り当てられながら昇進での口惜しい思いもした。男性は

自動的に50才から学芸部長の肩書きがついた。私の肩書きは先輩には離され、後輩には追いつかれ、最後は次長止りである。しかし、その肩書きのまゝではあったが、2年間、女性では初めての部長の仕事が与えられた。苦労は多かったが良い経験でやりがいがあった。将来は、女性もしっかりと部長のポストを勝ち取るだろう。

ただ、この美しい自然に囲まれて仕事が出来たことは幸せであった。永年丹精込めて文華苑を世話してこられた保安係はその功績を顕彰されるべきであろう。その思いから40周年に向けて「花の写真のパネル展示」を実現し、「花の美術展」を成功させ、共同企画展の相手方、福岡市美術館(1977年)と五島美術館(2003年)においては、文華苑の花々とコレクションを結びつけて、大和文華館をアピールする講演を行った。

美術館の中の仕事は館員一人一人が倫理とルールを厳しく守りながら工夫して行くべきである。名品は揃っているのだから。そして、緑も一自然も人の手によってその美しさが保たれる。永遠に残すべき、神が与えた贈り物なのだ。大和文華館は内外一体となってこそ一つの存在であり、その形で永遠に続くことを願う。

私は専門の金銅仏について、館のものは出来るだけ考察して紙面に残した。12月18日の定年後は、心身の疲れを癒しつつ、研究生活に没頭する。体力の続く限り。(9月3日記。緑と池の見える室にて。)



筆者自筆スケッチ

季刊 美のたより No.144

平成15年10月11日

発行 大和文華館